

学部長室から

極める

長澤寛道

Yayoi Highlight

昆虫の大発生に
強い森林、弱い森林

鎌田直人

農学最前線

メスの脳だけに存在する性ホルモン受容部位

太久保範聡

動物の「心」を理解したい!

武内 ゆかり

弥生散策

水圏生物科学研究用水槽

石井いり豆店

Events Report

自衛消防隊操法大会と防災訓練

放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会

第11回ホームカミングデイ/キノコに親しむ

学生体験活動プログラム/第43回農学部公開セミナー

附属演習林生態水文学研究所創立90周年記念シンポジウム

行事予定

Yayoi Café

国際獣疫事務局

オスとメスのバイオロジー

オスとメスでは、種々の行動パターンやストレス応答などに大きな違いが見られます。
そのような違いの多くは、脳内に存在する何らかの雌雄差によるものだと考えられます。
性ホルモンを受け取る受容体の脳内での分布を調べていくうちに、その機構の一端が見えてきました。

生殖行動に見られる雌雄の違い

オスとメスで決定的に違うパターンを示すのは生殖行動です。オスが求愛し、メスがそれを受け入れるという振る舞いそのものが違うのはもちろんのこと、多くの動物種では、オスは常に生殖行動を行うことができるのに対して、メスが生殖行動を行う時期や条件は限られています。しかし、こうした雌雄の違いがどのような仕組みで生じるのかはよく分かっていません。

メスの脳だけに存在する性ホルモン受容部位

メダカの脳を調べてみると、生殖行動を支配する脳領域には、メスのみで性ホルモン受容体（男性ホルモン受容体と女性ホルモン受容体）が存在することが分かりました。メダカではメスだけが生殖行動に性ホルモンの影響を受けることになります。オスが常に生殖行動を行うことができるのに対し、メスが生殖行動を行う時期や条件が限られているのは、性行動を支配する脳領域が、オスでは体内の性ホルモンの影響を受けないのに対して、メスでは体内の性ホルモンの量やバランスに大きな影響を受けるからだと考えられます。

脳の性別が転換する仕組み

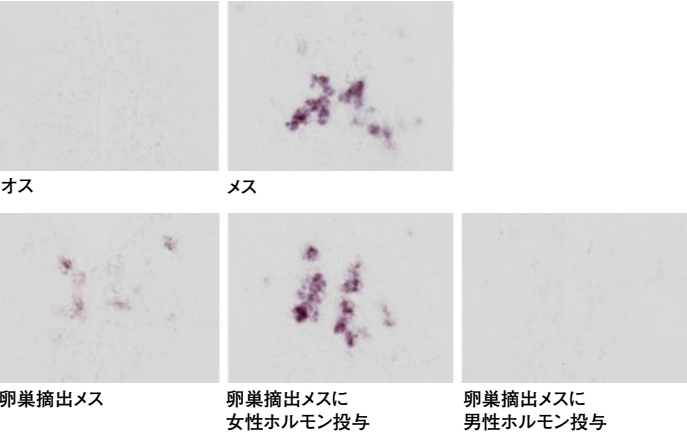
メスの脳だけに存在する性ホルモン受容体は、卵巣を摘出して、男性ホルモンを与えると消失しましたが、女性ホルモンを与えると、そのまま受容体は維持されることも分かりました。また、本来はメスのメダカでも、性転換させて精巣を発達させると性ホルモン受容体は消失し、本来はオスのメダカでも、性転換させ卵巣を発達させると受容体は出現しました。メダカの脳内の性ホルモン受容体の有無は、生まれつき決まっているのではなく、生後のホルモン環境で変わり得ることになります。このような仕組みが、魚類で一般的にみられる性転換現象、特に脳の性別の転換を可能にしていると考えられます。



メダカの脳。左側が前方で右側が後方。*印は生殖行動を支配する脳領域で、メス特異的な性ホルモン受容部位を示す。



日本発の実験動物であり、今回の研究に用いたメダカ。



メダカ脳内の生殖行動を支配する領域での女性ホルモン受容体。写真中の紫色の部分が女性ホルモン受容体を示す。この脳領域では、女性ホルモン受容体はメスのみに存在し、オスには存在しない。メスでも、卵巣を摘出すると減少するが、そこに女性ホルモンを補充すると回復し、男性ホルモンを与えるとオスと同様、完全に消失する。この脳領域では、男性ホルモン受容体も同様の挙動を示す。

教えて! Q&A

性ホルモン受容体

男性ホルモンや女性ホルモンといった性ホルモンは、細胞の中にある性ホルモン受容体という受け皿のような物質に結合することで、初めてその作用を発揮することができます。したがって、性ホルモンは全身に存在しますが、その影響を受けるのは、性ホルモン受容体がある細胞だけです。男性ホルモンが結合するのが男性ホルモン受容体、女性ホルモンが結合するのが女性ホルモン受容体です。

メスの脳だけに存在する性ホルモン受容部位

雌雄の脳の違いを理解する

水圏生物科学専攻 水族生理学研究室

おおくぼ かんたあき 大久保 範聡 准教授



動物の行動遺伝学

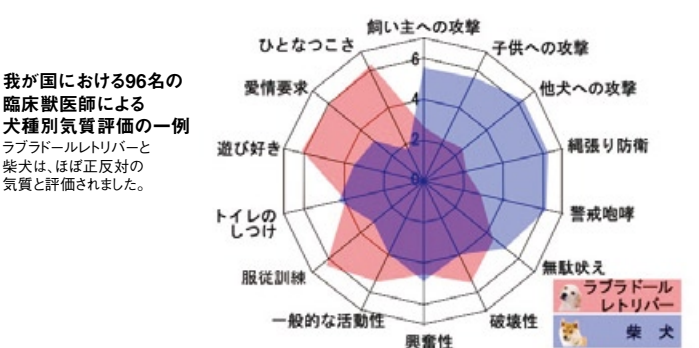
近年、ペットはコンパニオンアニマル（伴侶動物）と呼ばれ、多くの人たちが一緒に暮らすことで安らぎや癒しを享受しています。獣医学は動物の身体的健康を守るために発展してきましたが、現在は動物の「心」の健康を守ることに力も注ぎ始めています。

伴侶動物の行動診療

楽しい暮らしを夢見てスタートしたはずの動物との生活が、攻撃行動などの問題行動が生じることによって一変してしまうことも少なくありません。こうした事態に対応すべく、動物診療科目のなかに「行動診療科」が誕生しました。行動診療の基本方針は、飼い主に動物の行動特性を理解してもらうことによって、人と動物が幸せに暮らせるよう手助けをすることです。実際に問題行動を治療する際に、共通して用いられる手法には、行動修正法、薬物療法、外科的療法などがあります。

動物の気質はどのように形作られるのか？

私たち人間と同様に、動物にも個性が認められます。伴侶動物においても、興奮しやすい個体、攻撃的な個体、温順な個体、不安傾向の高い個体など様々な個性が認められ、同種あるいは同品種においても決して一様ではありません。こうした行動特性の情動的基盤は気質（Temperament: 行動特性の個体差）と呼ばれています。個性が遺伝によって決まるのか環境がより重要なのかは古くから論議されてきましたが、人間の一卵性双生児における研究から、現在は両者によって形作られると考えられています。正常範囲を逸脱した攻撃行動や常同障害といった行動疾患は気質に起因する部分が大きいため、私たちは、特に気質に関連する遺伝子を候補遺伝子解析法やゲノムワイド関連解析法を駆使して探索しています。

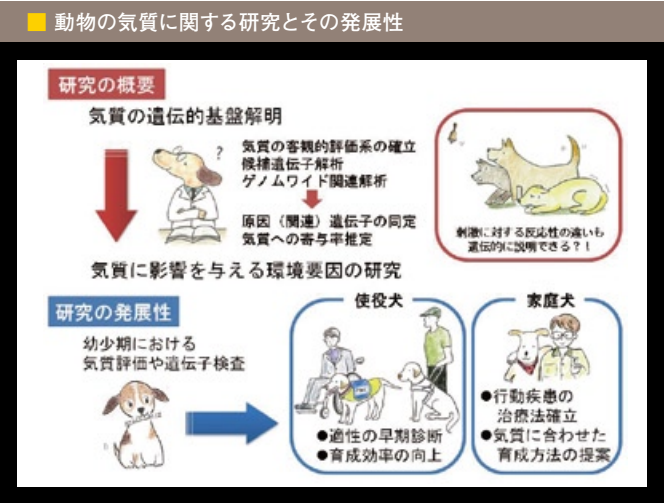
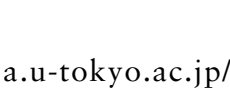


動物の「心」を理解したい！

行動疾患の原因となる気質の遺伝的基盤に関する研究

応用動物科学専攻 獣医動物行動学研究室

たけうち 武内ゆかり 准教授



研究の進展によって気質に関連する遺伝子群が同定されれば、盲導犬や探知犬といった使役犬の育成効率改善にも大きく役立つことが期待されます。また近年飼育数が増加している家庭犬に対しても、行動疾患に対する客観的な診断方法の確立に資するばかりでなく、個々の気質に合わせた飼育環境を考慮するための科学的根拠を提供することが可能となり、動物福祉の観点からも意義が大きいと考えられます。

教えて! Q&A

問題行動と行動疾患

伴侶動物の問題行動は、“異常な行動、社会や飼い主にとって迷惑となる行動、または飼い主の資産や動物自身を傷つける行動”あるいは“飼い主の生活に支障をきたす行動”などと定義づけられていますが、いずれも飼い主によって問題と認識された時点で「問題行動」となります。問題行動のなかでも飼い主側の要因が小さいものは、「行動疾患(医学分野における精神疾患と同等)」として扱われます。

常同障害

尾追い、尾かじり、影追い、光追い、実際には存在しない蝇追い、空気噛み、過度の舐め行動など、異常な頻度や持続時間で繰り返される強迫的もしくは幻覚的な行動を示す疾患。肢端や脇腹を舐め続けると、舐性皮膚炎や脱毛が生じる場合もあります。葛藤により生じ、人間の強迫性障害(OCD)に類似した行動疾患と考えられています。



候補遺伝子解析とゲノムワイド関連解析

疾患で生じている機能異常から原因遺伝子の候補を推定し、疾患との関連を解析する方法が「候補遺伝子解析」、疾患に関連する遺伝情報の違いを全ゲノム領域に渡って検索する方法が「ゲノムワイド関連解析」と呼ばれています。

キャンパスを歩き、街を訪ねる。

水族生理学研究室の金子豊二教授と弥生キャンパス7号館A棟地下の水槽を訪ね、森園管理学研究室の井出雄二教授と西片の老舗豆店を覗く。

地下室の海

水圏生物科学研究用水槽

「農」学部地下には海がある。そう聞いて、水族生理学研究室の金子豊二教授に案内をお願いした。行ってみると、なるほど7号館A棟の地下室に温度調節や濾過の機能を備えた「海」が、大小さまざまな20近く置かれていた。大きいものは容量3トンだ。

天井には給水パイプが伸びていて、蛇口に「海水」と書かれている。人工海水かと思ったら、これがれっきとした海の水。東海汽船の

船底に貯めたバラスト水をタンクローリーで運んだものだ。よく見ると「海水」のほか「水道水」や「脱塩素水」の蛇口もある。

青い水槽には掌ほどの大きさの魚がたくさん泳いでいた。「これはティラピア。海水でも淡水でも生きられるんですよ」と教授がこやかに話す。メスが受精卵を口に含んで守り、2週間ほど経つと、孵化した稚魚がふわふわと出てくるのだそうだ。「その間は断食ですか?」と訊くと、「魚は少々食べなくても死にません」と

言う。5年間絶食して、体重が4割減っただけのウナギもいたらしい。なぜこの道に入ったのか、魚の魅力について質問すると、教授は「観てよし、釣ってよし、食べてよし。哺乳類とまったく違う、異世界の住人。こんな面白い生き物はない」と笑った。



ティラピアの水槽を覗く金子豊二教授。

ティラピアは海水と淡水の両方に順応できるが、キンギョやコイは淡水だけ。前者の魚を広塩性と言い、後者を狭塩性という。その仕組みを分子レベル、細胞レベル、個体レベルで研究するのが仕事だ。

そういえば最近、魚で気になるのは塩よりも、放射性物質。すると教授が「魚は自分でカラダをきれいにする力がある」と教えてくれた。魚のカラダにはセシウムを体外に排出する機構があって、それを使って自浄する。体内の放射性物質が半減するのに要する期間のことを「生物学的半減期」というのだそうだ。

昔、東京湾でハゼ釣りをしていた少年が、東大で農学を学び、ハゼを研究して卒業。海洋研究所に13年勤め、10年ほど前この地下室の「海」に戻ってきた。水槽を覗くその瞳には、まだ少年の好奇心が宿っているように見えた。



煎り豆百年の味

石井いり豆店

西 片の菊坂下交差点近くに豆を売る店がある。あまり目立たないが明治20年(1887)からの老舗。石井いり豆店だ。

番重や地球壺など、昔懐かしい道具が揃った店の奥で、煎り機が休みなく働く。切り盛りするのは、店主の石井晴雄さんと妻の史江さん。晴雄さんは四代目だ。

初代は練馬の農家の次男坊で、増次郎といった。話では実家を出て、石井家の名籍を買い、家督となつて浅草の豆屋に商売を教わりに行ったそうだ。一年ほど修行して独立。この西片で店を開いた。以来、勘吉、富吉と続いて四代目晴雄さんに至る。

昭和10年ごろ道路拡張の際、創業以来の普請を建て替え、3年前さらに大改修をした。これを見ていたのが森園管理学研究室の井出雄二教授。学生時代から知っている店が取り壊しかと落胆していたが、できあがってみればもとの店。晴雄さんが設計士に「できるだけもとのままに」と頼んでおいたのだ。「あのときは本当に嬉しかった」と教授は顔をほころばせる。

井出教授は長年、散歩の途中にここの煎りそら豆を買うのが習いだ。豆は固いのと柔らかいのがあって、先生は固煎り派。「菌が欠けるくらい固いやつ」と言う。「口に含んで噛んでいると、豆本来の滋味が出てきて、とてもおいしいんです」



右から店主石井晴雄さん、史江さん、井出雄二教授

固煎りの豆は店主の人となりに重なる。史江さんいわく、「頑固ですね。仕入れ屋さんがお豆を持てきても、気に入らないと返しちゃうんです。お客様に品物がなくなっても、納得いかないとダメ。豆はひとつひとつを手で選り分け、目の届かない出店のは断ってしまう」

そんな話を聞きながら、ふとつまんだピーナッツに驚いた。その香ばしさと味わい。煎り豆一筋百年の秘伝かと思ったら、晴雄さんは言った。「いや、素材ですよ。こっちはただ煎っているだけです」。微塵の銜いもない。高くてもおいしいのは当たり前、そうではなくて「手ごろで結構おいしい」が信条の、豆好き必見の店だ。



information

◎お問い合わせ
石井いり豆店
住所: 東京都文京区西片1-2-7
電話: 03-3811-2457
<営業時間>
月曜~土曜 9:30-19:00
日曜祝日定休



防災訓練にホームカミングデイ、研究報告にキノコ観察、さらにはフィールド体験、公開セミナー、シンポジウム。
農学部になんだ最近の行事や話題をスナップショットでどうぞ。

September/November

自衛消防隊操法大会と防災訓練



9月14日（金）文京区の六義園運動公園にて、本郷消防署主催の平成24年度自衛消防隊操法大会が開催され、男子A隊の部において東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部自衛消防隊が、見事に優勝しました。

この大会には本郷消防署管内の各事業所から多くの自衛消防隊が参加し、大地震により火災が発生した際の一連の対応を行いました。農学生命科学研究科の自衛消防隊のメンバーは日頃の訓練の成果を遺憾なく発揮し、素晴らしい結果を収めました。



齋藤隊員、赤井田隊員、並木隊員、森隊員（左より）

11月7日（水）弥生キャンパスにおいて防災訓練が行われました。避難を呼び掛ける日本語と英語のアナウンスの後、教職員、学生の皆が農学部グラウンドに避難しました。今回初めて、避難の際に階段でも容易に怪我人を運ぶことのできる器具を利用した訓練も実施されました。その後、農学生命科学研究科の自衛消防隊による放水の実演、希望者による消火器での消火体験と続きました。消火は最初が肝心と、皆さんしっかりと消火器での消火に取り組んでいました。こうして無事に防災訓練は終了しました。



農学部グラウンドに避難



長澤研究科長のご挨拶



東原先生のご講演



経塚先生のご講演

October

第11回ホームカミングデイ

10月20日（土）第11回東京大学ホームカミングデイが開催されました。農学生命科学研究科・農学部ではイベントとして、フードサイエンス棟中島董一郎記念ホールにて講演会、エントランスホールにて懇親会を開催し、今年も多くの卒業生にお集まりいただきました。

講演会は長澤寛道研究科長のごあいさつに始まり、引き続き生産・環境生物学専攻経塚淳子准教授により「百花繚乱の謎：花の見かけは遺伝子でま

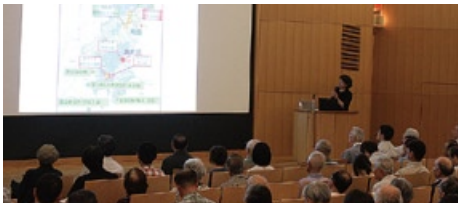
September/December

放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会（第4回及び第5回）

放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会の第4回を9月8日（土）に弥生講堂・一条ホールにて、第5回を12月8日（土）に安田講堂にて開催いたしました。

この研究報告会は2011年3月11日に起こった東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故により引き起こされた放射能汚染に関し、農学生命科学研究科において取り組んでいるプロジェクトについて、その成果を定期的に報告しているものです。

第4回、第5回の研究報告会では農地の除染や果実への影響について、汚染から2年を経た水田でのコメへの放射性セシウムの影響や、漁業に関する放射能と食品に対する市民の購買行動など、非常に幅広い成果について、多くの教員と福島県農業総合センターの研究員から報告がありました。報告会では多くの質問を寄せられ、いまだに治まらない放射能汚染に対する関心の高さがうかがえました。



第4回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会（弥生講堂にて）



第5回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会（安田講堂にて）

October

キノコに親しむ

10月13日（土）、富士癒しの森研究所にて東大教職員とその家族を対象とした恒例行事「キノコに親しむ」が開催されました。山中湖畔に位置する富士癒しの森にはカラマツが多く、カラマツ林に特有の「ハナイグチ」というキノコが多く育ちます。ハナイグチはナメコに似ていて大きいのですが、落葉に覆われた地面から見つけることはなかなか大変です。やっと見つけても、カサの裏がナメクジに食べられていたり、きれいなハナイグチは多くありませんでした。

富士癒しの森研究所の入り口にはきれいな手作りの木のブロック看板がかかっていました。これは昨年7月にリニューアルされた看板で、職員や一般の方より寄せられた絵パネルを使用しているそうです。

天気にも恵まれ、心から癒された一日となりました。



注意事項を聞く参加者



リニューアルされた看板

December

附属演習林生態水文学研究所創立90周年記念シンポジウム

12月1日（土）、附属演習林生態水文学研究所の創立90周年記念シンポジウム「はげ山の緑化と森林の再生—森林の未来に向けて大学の果たす役割—」が、同研究所のある愛知県瀬戸市にて開催されました。当日は、全国から、研究者、行政担当者、森林関係のボランティア、一般市民など約200人の方々に来場いただき、基調講演者の太田猛彦・本学名誉教授には、かつては至る所にあった「はげ山」がほとんど無くなった現代の日本における、森林や国土に関する新

November/December

「学生体験活動プログラム」



今年度導入された全学的な取り組みである「学生の体験活動プログラム」の一環として、附属演習林では樹芸研究所の「伊豆に学ぶ応用編—南伊豆という一地域との連携に学ぶ—」と富士癒しの森研究所の「癒しの森の落ち葉焚き」の2つのフィールド体験活動を実施しました。

「伊豆に学ぶ応用編」では、「人の暮らしと生態系の関わり」を基調テーマとして実施しました。特に、竹林、旧薪炭林、獣害などの森林を取り巻く現実を目に向け解決に取り組む体験に重点を置いたのが特徴です。11月から12月にかけての3回の週末にわた

る活動でしたが、3名の学生が参加し、大学内に留まっていたのでは学ぶことのできない、生（なま）の社会連携を体験してもらいました。

「癒しの森の落ち葉焚き」では、失われつつある森林に関わる文化に触れ、季節の変化と自然との中で生きてきた日本人の心に触れる機会を提供しました。12月26日から27日にかけて行われた活動には2名の学生が参加し、落ち葉焚きにつきものの「焼き芋」を味わったり、参加者と一緒に昼食をとったりと、かつての里山の文化（？）の一端に触れながら一連の活動を行いました。



November

第43回農学部公開セミナー

11月10日（土）第43回農学部公開セミナーが弥生講堂・一条ホールにおいて開催されました。秋の穏やかな日で、多くの方々にご来場いただきました。今回のテーマは「グローバル化経済と日本の農業」。昨今話題となっているTPPや食品の流通といった、経済学的側面からの農学に関する話題が取り上げられました。

今回のセミナーはテーマに合わせパネルディスカッションも取り入れられ、とても好評でした。

次回第44回農学部公開セミナーは、2013年6月15日（土）に開催の予定です。



4月

■ 進入学式・ガイダンス 4月4日(木)
■ 授業開始 4月5日(金)

■ 入学式 4月12日(金)
■ 集中講義 (海外における安全管理論) 4月16日(火)～17日(水)

■ 鴨川市交流事業「野鳥の巣箱をかけよう」
(巣箱観察)

日時 4月6日(土)
場所 千葉演習林
主催 千葉演習林
共催 鴨川市
問合せ先 千葉演習林
TEL: 04-7094-0621
E-mail: chibaen@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chiba/
◆参加資格: 2012年11月の開催参加者のみ

■ 第44回 文京つつじまつり

日時 4月6日(土)～5月6日(月・振休)
場所 根津神社
問合せ先 根津神社
TEL: 03-3822-0753 (受付時間9:00～17:00)
E-mail: webmaste@nedujinja.or.jp
http://www.nedujinja.or.jp/

■ 春の一般公開

日時 4月20日(土)～21日(日)
場所 千葉演習林 猪ノ川林道
主催 千葉演習林
問合せ先 千葉演習林
TEL: 04-7094-0621
E-mail: chibaen@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chiba/

■ 第六回放射能の農畜水産物等への
影響についての研究報告会

日時 4月20日(土)
場所 弥生講堂・一条ホール
主催 大学院農学生命科学研究科
共催 東京大学 救援・復興支援室
問合せ先 総務課総務チーム総務・広報情報担当
TEL: 03-5841-8179 / 5484
E-mail: koho@ofc.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.a.u-tokyo.ac.jp/rpjt/index.html

■ 東大教職員向け特別ガイド「春の彩りを訪ねて」

日時 4月20日(土)
場所 富士癒しの森研究所
問合せ先 富士癒しの森研究所
TEL: 0555-62-0012
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/fuji/

■ 温室特別公開日

日時 4月下旬(2回開催予定)
場所 樹芸研究所
主催 樹芸研究所
問合せ先 樹芸研究所
TEL: 0558-62-0021
E-mail: jyugeiken@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/jyugei/

5月

■ 東京大学 第86回五月祭

日時 5月18日(土)～19日(日)
問合せ先 東京大学五月祭常任委員会
TEL: 03-5684-4594
http://www.a103.net/may/86/visitor/

■ 公開講座 春の散策 (仮)

日時 5月
場所 樹芸研究所
主催 樹芸研究所
問合せ先 樹芸研究所
TEL: 0558-62-0021
E-mail: jyugeiken@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/jyugei/

6月

■ 「子ども樹木博士」認定会

日時 6月2日(日)
場所 田無演習林
主催 西東京市「子ども樹木博士」を育てる会
問合せ先 田無演習林
TEL: 042-461-1528
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/tanashi/

■ 第44回 農学部公開セミナー
「健康を支える食の科学」

日時 6月15日(土)
場所 弥生講堂・一条ホール
主催 大学院農学生命科学研究科・農学部
共催 (公財)農学会
問合せ先 総務課総務チーム総務・広報情報担当
TEL: 03-5841-8179 / 5484
E-mail: koho@ofc.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.a.u-tokyo.ac.jp/seminar/index.html

■ 公開セミナー

日時 6月23日(日)
場所 北海道演習林
主催 北海道演習林
問合せ 北海道演習林
TEL: 0167-42-2111
E-mail: hokuen@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/hokuen/

■ 大祓・茅の輪くぐり

日時 6月30日(日)
場所 根津神社
問合せ先 根津神社
TEL: 03-3822-0753 (受付時間9:00～17:00)
E-mail: webmaste@nedujinja.or.jp
http://www.nedujinja.or.jp/

7月

■ 高校生ゼミナール

日時 7月下旬
場所 千葉演習林・千葉大学海洋バイオシステム研究センター
主催 千葉演習林
共催 千葉大学海洋バイオシステム研究センター
問合せ先 千葉演習林
TEL: 04-7094-0621
E-mail: chibaen@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chiba/
◆参加資格: 高校生

■ 公開講座 子ども樹木博士 (仮)

日時 7月
場所 樹芸研究所
主催 樹芸研究所
問合せ先 樹芸研究所
TEL: 0558-62-0021
E-mail: jyugeiken@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/jyugei/

■ 授業終了 7月29日(月)

■ 夏学期試験 7月30日(火)～8月5日(月)

9月

■ 根津神社 例大祭

日時 9月21日(土)～22日(日)
場所 根津神社
問合せ先 根津神社
TEL: 03-3822-0753 (受付時間9:00～17:00)
E-mail: webmaste@nedujinja.or.jp
http://www.nedujinja.or.jp/

■ 秋季卒業式 9月27日(金)

10月

■ 温室特別公開日

日時 10月(2回開催)
場所 樹芸研究所
主催 樹芸研究所
問合せ先 樹芸研究所
TEL: 0558-62-0021
E-mail: jyugeiken@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/jyugei/

Yayoi 12 Café

from Graduate School of Agricultural and Life Sciences

国際獣疫事務局

世界の中の Yayoi?!



みなさん、「OIE」をご存知ですか?動物衛生に関する国際政府機関機関で、日本語では国際獣疫事務局と呼びます。私たち、OIEアジア太平洋地域事務所は、2011年にフードサイエンス棟の5階に引っ越してきました。獣医系でない方にも知っていただきたいので、少しOIEの話をさせていただきます。

2011年にOIEとFAO(こちらは農学系の方はご存知ですよね?)は牛疫の根絶を宣言しました。伝染病の根絶宣言としては、1980年の天然痘以来、2つめです。牛疫とは偶蹄類のウイルス感染症で、牛や水牛で致死率が高いため、長い間非常に恐れてきた疾病です。欧州で牛疫が広がったことを契機に、OIEは1924年にパリに設立されました。伝染病の征圧のためには、情報共有と対策において国際的な協力が必須だと考えられたためです。



牛疫以外にも、口蹄疫、BSE、狂犬病など多くの疾病について、発生や防疫に関する科学的情報の収集と提供、国境で適用すべき検疫措置の国際基準の作成、加盟国の獣医サービスの強化などがOIEの主な活動です。BSEや口蹄疫のニュースを注意して聞いてみてください。「OIEの基準によれば…」とか「OIEの清浄国認定が…」という言葉が耳に入ってくるでしょう。OIEには自前の研究所はありません。科学的な知見は加盟国の専門家や研究所の協力を得て収集します。東大とのお付き合いも、食の安全研究センターがOIEの協力機関となった2009年以来、緊密になりました。そのご縁で入居させていただいたのです。私を含めアジア加盟国の獣医が5～6人、これに補助職員数名の小さな事務所です。

食の安全以外にも魚病、経済分析、獣医学教育の改善などでも大学と協力できそうです。加盟国の代表や専門家を招き、学内で時々会議を開いており、これを利用し、獣医学専攻の学生の実習も始めました。関心のある学生は大歓迎です。国際機関の仕事を経験できる場、情報の供給源として、是非、活用してください。活動の詳細は事務所のウェブサイト(http://www.rr-asia.oie.int/)でもご覧になれます。

国際獣疫事務局 (OIE) アジア太平洋地域事務所

代表代行 石橋朋子

弥生 Yayoi
56 Spring
2013

編集後記

機貝明前広報室長にお誘い頂いてから、広報室員として2期が過ぎようとしています。本56号のテーマは「極める」で、54号「望む」、55号「鍛える」とともに、震災後の53号のテーマ「興す」の次号からの三部作の締めくくりです。観察し、予想し、精錬されて到達したものとなっていますかどうか、ご賞味頂ければ幸いです。

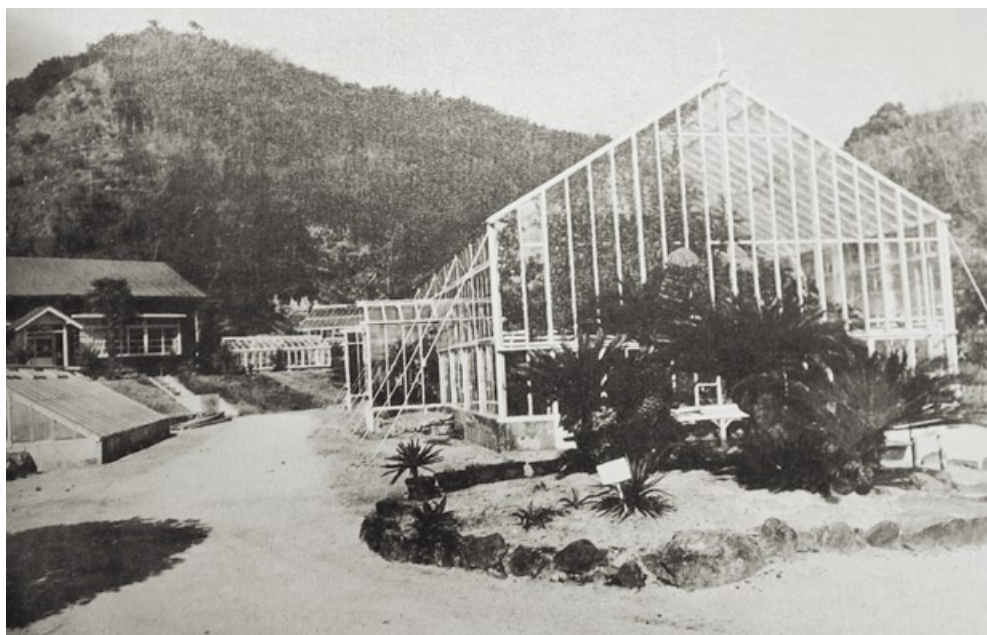
本稿は1月に書いておりますが、昨年は京都大学の山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞を受賞されたこともあり、iPS細胞が話題とな

りました。植物では当たり前(?)である全能性というのが、高等動物ではこれほど難しいということは、興味深いとともに、動植物をともに扱う農学の領域にこそチャンスがあるのでは、と期待しています。

次号から、また新たな室長のもとで編集することになります。これまで以上に、学内外の方々に興味を持って頂けるような弥生を目指して行きたいと思います。乞うご期待!

広報室 松本安喜

グリーンエネルギーの 植物園



1956年卒業アルバム掲載の「樹芸研究所」スナップ写真

（ ）

の写真には1955（昭和30）年頃の樹芸研究所加納事務所（写真左奥）と大温室（写真右）が写っています。樹芸研究所が伊豆半島の石廊崎のほど近くに誕生したのは1943（昭和18）年のことです。この大温室は1947（昭和22）年に千葉演習林産材を用いて建てられました。面積260㎡、高さ7mの木造ガラス張りで、当時としては大規模な温室だったそうです。翌1948（昭和23）年に、地下149mに自噴する温泉が掘り当てられました。泉質は塩泉で、噴出量は1分間に200ℓ、温度は100度以上と良質なものです。源泉は温室から320m離れていますが、自噴した温泉を高さ12mの槽の上に設置した槽に蓄え、高低差を利用して温室まで引いています。この温室は電気も燃料も使わずにグリーンエネルギー（温泉熱）を利用している近年はやりの「エコ」な温室であることをもっと宣伝するべきかもしれません。当時、温室内にはパパイヤなどの果樹やヤシがたくさん植えられていたそうです。そのころは、まだ植物園というものが珍しく、新聞等にも珍しい植物の記事が頻繁に掲載されました。イランイランの本邦初開花やカシウの本邦初結実などの新聞記事の切り抜きが残っています。そして年間二万人の見学者が樹芸研究所の温室を訪れたといえますから驚きます。

この写真の紹介文を書くことをお引き受けして、私は初めて樹芸研究所に残る昔のアルバムを開いてみました。そこでは私たちも取り組んでみようと思っていたものから、思いもしなかったもので、先人たちのいろいろの思いに触れることができました。今私たちが情熱を傾けている事業もいつの日かこの写真の様に後進たちに顧みられる日が来るのかもしれない、そういう思いを馳せながら、開所70周年を迎えた樹芸研究所の歴史にあたたかいページを刻んでいきたいと思っています。樹芸研究所ではそうした取り組みの一つとして、温室で育てているカカオ、キャッサバをそれぞれチョコレートやタピオカなど馴染みのある食品に加工する体験型教育プログラムを実施しています。

樹芸研究所

鴨田重裕 所長